

カトリック香里教会 受難の主日 2021年3月28日

夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったのです、ピラトは不思議に思った。ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」

-マルコ 15章-

主の僕の姿

いよいよ主の受難の時が来て、イザヤの預言には、「主の僕」が登場します。

主の僕とは、マリアさまが神の前でご自分を「主のはしため」と呼ばれたあの姿、神の心が自分の身に起こるようと、全面的に神に信頼し身を委ねた、神の心になつた者の姿であり、母マリアさまとともに、子であるイエスさまの姿です。

主は、聞く耳を持たない者、すなわち、ご自分の敵対者、迫害者、殺人者の前には、戦う軍馬ではなく、平和の象徴である「子ロバ」に乗って登場し、逆らわず、争わずして、沈黙のまま敵に身を任せます。

この意味を理解するために、私たちは、地上に於ける私たちの真の敵は、人ではなく、人の背後でその人をコントロールしている悪霊の存在であることを知ることは大切です。悪霊は人の自我に住むことが許されているゆえに、私たちは自分の自我が悪霊に取り込まれないように、自我を封じる必要があるのです。人の子イエスさまが敗北に見える沈黙に入るのは、ご自分の自我に悪霊の介入を許さないためです。それは究極的に自分に死ぬことなのです。「お前が神なら降りてみよ」

十字架上でこの最後の誘惑に、それゆえイエスは誰からも神であることを理解されないまま逝くのです。父なる神は、この僕の従順ゆえに悪魔に拉致された敵対者、人類の罪に憐れみを注がれるのです。この父と子の、人類をかわいそうに思ってください「無償の愛」が私たちに支配してくださるように主の十字架を仰ぎましょう。

2021年3月28日 主任司祭 昌川 信雄

